



Field Note

中国雲南省麗江調査記

トンバ 東巴文化の今昔



田上 繁・中村 政則・的場 昭弘・佐野 賢治

report

田上 繁（神奈川県立大学大学院歴史民俗資料科学研究科・教授）

1

東巴經典と現代に伝わる原初的な紙製法

日本経済史を専攻する私にとって、生涯、海外で研究調査を行うことなどないものと思っていたが、本年3月初旬、COEプログラム研究の一環として初めて中国を訪問する機会に恵まれた。今回調査した雲南省麗江市は、麗江古城が1997年に世界遺産に指定されたことに加え、東巴文化研究院による『納西東巴古籍訳注全集』、長江上流の三江併流地域が、それぞれ「無形の記憶」、「自然と文化」の世界遺産として登録された街である。

とくに、現在、世界で使用されている唯一の象形文字である納西族の東巴文字で書き表された、約3万巻、1800種類にもおよぶ東巴經典の主要なものを収録した『納西東巴古籍訳注全集』は、納西族の自然観・靈魂観・世界観などを知る上できわめて貴重なものとなっている。本全集は100巻からなり、玉龍公園内にある東巴文化研究院において老東巴が經典や儀式の次第を思い出しては記し、研究員がその解釈文を刊行していくといった作業が進められたという。

私たち調査団一行がその東巴文化研究院を訪ねたのは、

調査半ばの3月8日のことであった。研究院院長世紅氏をはじめ研究員から本全集の編集から刊行に至るまでの経緯を詳しくうかがい、經典をスキャナーで読みとり、それらをすべて収録する、東巴による解説と研究員による国際音標への読み替え、さらに納西語による翻訳、中国語による直訳、中国語での意味説明、といった過程を経て完成させた本全集の編集方針から学ぶことは多い。そして、単に学術面だけを追及するのではなく、こうした編集事業が研究院と民間との結合を企図して推進されていることに、東巴文化の継承、若者の東巴養成といった課題を真正面から取り組もうとする関係者の姿勢を読みとることができる。

ところで、同研究院を辞去しようとしたとき、庭の片隅で紙を製造している1人の職人に出くわした。その職人は、晴天のもと簡易な道具を使って一心に作業を続けていた。主な道具は、繊維（原料はジンチョウゲ科の雁皮と思われる）とネリ（原料は不明）と水をかき混ぜて紙料液（原質）を作るための竹製の円筒状の入れ物、木の

写真1



紙製造のための道具 バター茶用の竹筒を利用した紙料液器、石製の紙槽、箆を敷いた浮き箆（民俗村にて）

写真2



「溜め漉き」による紙の製造（東巴文化研究院にて）

写真3



「箆伏せ」による乾燥と空き瓶による整え作業（東巴文化研究院にて）

枠に簀を敷いた紙漉き器（紙模。浮き簀）その紙漉き器を浮かべる紙槽、それに乾燥用のブリキを張った木板だけである（写真1）。手漉き紙の製法には「溜め漉き」と「流し漉き」とがあるが、この製法は紙漉き器を水を入れた紙槽に浮かべて行う「溜め漉き」である（写真2）。しかも、そこでは漉き終えた紙を簀の上に乗せたまま運び、直接乾燥板に張り付ける「簀伏せ」の技法が採用されている（写真3）。その場合、刷毛は一切使わず、空き瓶を使って紙を整えている。これは、表面を平にし、かつ光沢を出すために行われるものである。従来は動物の牙などが利用されていたといわれる。

中国で発明された紙（現在知りうる最古のものは前漢時代の遺跡から発掘された麻紙といわれる）の製法は、シルクロードを経て西方や、また、東南アジア、朝鮮半

島、日本にも伝播してその技法が発達していったが、麗江において現在もなお、最も原始的な方法で紙が製造されていることに驚かされた。そこで製造される紙は、東巴經典を書いたり、その文字練習のために利用されるもので、したがって、道具の浮き簀も經典用の紙の大きさになっている。東巴經典は納西族の民族文化のエッセンスともいわれるが、紙の製法もその經典と一体となって原始的技法を保持しながら今日まで継承されてきたのである。その製造方法、無駄のない身体の動き、簡易な道具、繊維の原料やネリの種類、など紙製法の歴史と職人技法（身体技法を含む）さらに、世界への伝播のあり方を究明する上で多くの示唆を与えてくれる。この一事をもっとしても、今回の麗江訪問は実りの多い調査であった。

report

中村 政則（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所・教授）

2 世界常民 雲南省で考える

今回の雲南省調査は私にとって初めての民俗調査であったが、まことに興味深く、有意義なものであった。昆明・麗江・大理市の博物館、図書館、民俗研究所、民俗文化研究院などを訪問し、館長・研究院長などの話を聞いたり、展示物を実見して、「百聞は一見にしかず」の古語を思い出した。リーダーの佐野賢治氏が20年にわたって培ってきた現地の民俗学者との人間関係のおかげで、行く先々で歓待をうけ、実に楽しく能率的な調査ができた。「本当の民俗調査はこんなものではありません」と佐野氏はいっていたが、確かに私たちは苦労することもなく、いい人、いい景色、いい文化遺産に出会え、美味しい料理を最後まで堪能できた。研究の面でも、私が

得た収穫は少なくない。以下に、三つの感想を述べておきたい。

1. グローバリゼーションと文化

雲南省は北京・上海などの大都市にくらべれば、中国西南部の周辺に位置する。ところが省都昆明に到着してみても、その大地方都市ぶりに驚いた。人口は400万人、中心街はまるで東京新宿の大通りを思わせるような混雑ぶりであった。3日後に主目的地・麗江に行ってみると、有名な古城（旧市街）は旅行者で賑わっていた。1997年に世界遺産に指定されたこともあって、観光地化はいつそう進展していた。出かける前に『グローバル化で文化はどうなる？』（藤原書店、2004）を読んだばかりなので、いつしか経済成長と文化の関係に思いをめぐらしていた。ただ、案内役の白庚勝氏（納西族の民俗学者）が観光地化というけれど、麗江市を世界に知らせ、多くの人々に来てもらうことは、「30万納西族の自立とアイデンティティを守るたかいたいのだ」と述べたことが忘れられない。

2. 三層文化論

今回の調査で、私は文字資料と非文字資料との関係について考えていた。順列組み合わせでいけば、文字資





料を文字資料だけで読む、非文字資料を非文字資料だけで読む、文字資料は非文字資料に補完されなければ読めない、非文字資料は文字資料に補完されなければ読めない、この4通りの立場がある。このことを話すと、先ほどの白氏が面白いことを言った。東巴文化を理解するには、三層文化を考慮に入れたほうがいい。つまりに漢民族の文字(漢字)文化、に納西族の東巴文化があって、底辺に民衆の非文字文化がある。の非文字文化が蒸気のように立ち上がり、の文字文化が雨のように下に浸透して、真ん中の東巴文化が形成されるというのである。卓見だと思った。ちなみに、麗江を歩き回っていて、3という数字に気づいた。上に極楽、中に人間界、下に地獄という区分、東巴儀礼も数百種類あるというが、大きく分ければ祭天(祖先を祭る) 祭署(竜神、水の神様を祀る) 祭風(心中で亡くなった人を弔う)の3つに分けることも可能だ。そういえば、麗江のホテルでご馳走になった高級納西料理も、前菜から始まって中菜、メインディッシュと三段階に分かれていた。なぜ三つなのか、私は思考が弁証法的だからだと酒宴の席

で感想を述べたが、ヘーゲルのいえば納西族は媒介の論理を得意としているのかもしれない。

3. 世界常民

中国は多民族複合社会である。とはいえ、55プラス1といわれるように55の少数民族と漢民族という対比であって、漢民族が全人口の9割以上を占めている。そういうこともあって、中国政府は少数民族政策に力を入れている。私は雲南省民族博物館の展示を見ながら、民衆は世界どこでも同じように生きているのだなと思った。展示されていた民族衣装や装身具あるいは椅子や彫刻など諸民族の工芸品に優劣はなく、対等の価値をもつ。私は民俗学者や文化人類学者が文化相対主義の立場に立つのが非常によくわかった。とっさに世界常民という言葉が思い浮かんだ。柳田国男に同じ言葉があるだろうと思って、佐野氏に聞くと、柳田は世界民俗学という言葉を使っているが、世界常民という言葉はないという。無いのなら、世界常民という言葉をつくれればいいと思った。新しい方法の構築に結びつくはずである。

report 的場 昭弘(神奈川大学大学院経済学研究科・教授)

3 麗江と大理の狭間で考えたこと

3月6日土曜日昆明発の飛行機は麗江空港に着陸した。つい数年前までは大理経由でしか行けなかったという。その変容振りに一同驚く。市内に入り、町を見学したが、そこでさらに驚く。人類の文化遺産に指定されたことを示す大看板と観光客の人だかり。確かに、東巴文字、古城、玉龍雪山、金沙江回流など観光の目玉はいくつもある。かつての秘境と現在の観光地。この二つの微妙な対比それ自体ですら観光かもしれない。

3月9日に訪ねた大理はこれとまったく違っていた。閑古鳥の鳴く市内、人気のない飛行場。食事をねだる子供たちの群れ。もはや盛りを過ぎた観光地である。中国社会の発展のひとつの有様を示すものと言えようが、文化政策自体の有様も示していると言える。

雲南省は少数民族の土地であるから、それぞれの文化遺産に誇りをもち、それを言わば見世物にすることはおかしいことではない。むしろ漢民族を中心とする中央政府による国民的文化遺産に対するアンチでもある。地域

から文化を発信することは、今では世界の趨勢でもある。

かつて1980年フランスで文化遺産年が実施され、慣習や作法などありとあらゆるものが、これまでのおきまりの文化遺産にとって代わって展示されるようになった。「おらが村の文化遺産」こそ、文字資料中心の国家の歴史の対極にあるものである。これは文化遺産が国家の記念物から、地域や集団の記念物に少しずつ変わってきたこ



世界遺産登録記念壁と復元された水車

とを意味している。もちろんそれぞれの集団には文字資料や歴史資料が欠けているのであり、文化遺産をつくりだすには集団の記憶が必要とされる。

だとすれば、麗江も大理も結構なことなのかもしれない。とはいえ、「おらが村の文化遺産」も中央政府の文化政策を抜きにして語ることはできない。麗江の町に次から次へと建てられるホテルや施設、道路など巨大なインフラ整備を地方が担えるはずがない。一方すでに投資が終わり、忘れられた感のある大理。いつ麗江が大理になるかわからない。

これらの町が語りかけているものは、歴史と文化をめぐる社会の変化の姿なのである。国家による民族政策という枠の中で展開する民族の記憶のあり方がまさにそれである。中国史の中では傍流にしかすぎない納西族の麗江が、人類の文化遺産となることによって突然世界の注目を浴びると、それは中国史全体を揺るがしかねない変容を与えるのである。歴史上の位置から言えば、文字資料を見る限り大理がはるかに上である。しかし、文化遺産がもはやそうした中国の正史や文字資料を前提にしな

いとすれば、すなわち現在のわれわれの記憶から見るとすれば、東巴文字や納西族の方にむしろ興味が湧く。

しかしながら中国における民族政策や文化政策のコード（指し示す意味）が、麗江を高く評価し、その文化遺産の復興を意図しているものだと断定するにはまだ早い。むしろユネスコによって制度化された人類の文化遺産という権威がもたらしたものである。失われた文化遺産の保護をつうじて、これまで国家的記憶の末席を汚すにすぎなかった名もなき地域の文化遺産が注目を浴びるようになったのである。

非文字資料の体系化ということを読み浮かべるとき、こうした社会の変化を忘れることはできない。文字資料と国家という枠組みの崩壊の上に非文字資料とグローバル化がある。だとすれば、非文字資料を体系化するという試みは、人々が何を記憶したいかという問題を抜きにして語ることはできない。すなわち記憶のコードの意味を掴み取るこそ非文字資料の体系化なのであろう。

report

佐野 賢治（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科・教授）

4 “観光”という情報発信

この春、5年ぶりに麗江を訪れその変貌ぶりに目を見張った。1999年に参加した国際東巴文化芸術節は、1996年の麗江大地震を克服し、97年旧市街が世界遺産に登録されたことを記念して開催された。主会場となった体育場正面には、この世とあの世を結ぶ巨大な神路図が設えられ、フィナーレは民族創生神話、黒白戦争を題材にした老若男女による創作劇というように民族の祭典といえるものだった。学術方面では国際学術研究会が開かれた。郭大烈・白庚勝という納西族の民族・民俗学者が総合プロデュースした結果ともいえるが、納西族の文化が東巴文化を中心に国内外にアピールされた。その頃から、日本でもその象形デザインの斬新さから東巴文字がTシャツや缶飲料のロゴに使われているのを目にするようになった。

今回訪れた麗江古城には土産物店が並び、郷土料理店には観光客があふれていた。その数、年間300万人という、納西族人口の10倍の数である。中心の四方街では、自然

発生的に民謡アリリに合わせて踊りの輪ができ主客の交歓が行われていた。死後、納西族の人々の霊魂が赴くとされる霊峰、玉龍雪山の麓には、民俗村や巨大な神路図を中心に納西族の神々を配した万神園が開園していた。一方、東巴文化研究院では東巴經典の校訂作業が継続して行われ、東巴文化博物館では東巴文化の展示はむろんのこと、東巴文化学校を設立し、その教科書として『納西象形文字』、『納西族伝統祭祀儀式』、『納西象形文古籍』、『納西族伝統工芸』が作られ東巴の後継者養成にあたっていた。2003年、3万巻1800種類に及ぶ東巴經典のうち、主要なものに英文要旨・国際音標・漢語の直訳、意識をつけた『納西東巴古籍訳注全集』100巻が無形の記憶遺産として、世界遺産に登録された。この年、第2回国際東巴文化芸術節が東巴文化百年成就展として開かれ、学術研究の国際化が再確認された。納西族の研究者の努力により、学術と観光がバランスよく結びつき、麗江地区の発展に寄与している姿をそこに見た。



しかし、観光開発も一因するのか以前に比べ流水の水質汚染などを見ると将来にわたる持続への懸念が頭をよぎった。中国のどこの町に比べても、文字通り麗江の町の水が清冽なのは、水の神、龍神に対する信仰、自然との共生を説く東巴教がその背景にあるからである（表紙写真）。

再会を楽しみにしていた、1993～96年の民俗総合調査の折に話を聞いた東巴文化研究院の老東巴はみな鬼籍に入られていた。そのうちの一人、日本訪問を熱望していた和開祥師は自分が死んだら、あの世へ行けるだろうかと神路図の解説をしながら気をもんでいた。大東巴の霊を送る儀礼を執行できる東巴が自分以外にいなかったからである。東巴文字によって記された東巴經典の解釈は東巴によって微妙に違う。東巴文字はもともと東巴儀礼を記すために生まれ使われてきた。まさに、儀礼という非文字資料を文字化したものであり、儀礼を知悉していないと読み解けないのである。一般庶民の葬式で神路図を使うことは絶えて久しい。考えてみれば、私自身、東巴文化の伝統的な雰囲気をかろうじて体感できたとともに、観光資源として再構成されていく過程、文化遺産としての記録と継承のそれぞれの場面に立ちあってきたことになる。

振り返ってみると日本では、柳田國男『遠野物語』をベースに“民話の里”として地域振興を推進する岩手県遠野市の事業を始め、民俗芸能などが各地の町おこし・

村おこしのイベントとなっている。民俗学と観光開発の関係が正面から問われている。お隣の韓国では、さまざまなムードン儀礼が行われる“端午節”の世界遺産登録を視野に入れた国際民俗祭が今年の6月、江陵で開かれた。「無形文化遺産とその保護」を中心テーマとしてアジア民俗学会が会期の初めに開かれた。近代化の中で省みられなかった、無形・有形民俗文化への取り組みがそれぞれの国情に応じて報告された。昨年、慶州でのユネスコ文化万博では「文化の多様性と普遍的価値」が、今秋10月のICOMソウル会議では「無形文化遺産と博物館」がメインテーマとなっている。伝統文化の保護と活用が、ローカル・ナショナル・グローバルそれぞれの立場から注目されている。

観光の語は、もともと『易経』の国の光を見るに由る。政治作用と民俗変化の関係、移レ風易レ俗（風を移して俗を易える）風俗の語とともに為政者と民衆生活の関係を表している。バリ島のケチャ、アイヌ民族の熊彫りなど具体的事例研究も含め、民族・民俗文化を動的・イメージ的な視点から、あるいはフォークロリズムという観点から考察する観光人類学・民俗学という分野での論考も近年重ねられてきている。

非文字資料と無形の文化遺産はその性格が重なる面が多い。研究成果の地域的還元、世界に向けての情報発信法として“観光”の意味を考えさせられた麗江行であった。



無形の記憶遺産として世界遺産に登録された『納西東巴古籍詁注全集』100巻（東巴文化研究院）

玉龍雪山の麓、万神園の巨大神路図の前でポーズをとる老東巴